

珈琲のある風景

埼玉県川越市 宜保菊江 (87)

年令相応に体力の衰えはじめた母親を案じたのか、息子が独身の身軽さで突然同居を申し出たときは、なかば独り身の気軽さをなくす失望と安心感があった。母親に似て気むつかしいところのある息子との同居は少し気が重かった。それも身からでた錆とあきらめることにする。

親子でも久しぶりの同居は、おたがいに距離をはかりつつ様子を見るところは、突然同じ家に飼われる事になってとまどう猫同士に似ているようだ。

お互いの習性は熟知しているのだが、まったく違う生活習慣のなかにいたもの同士は、やはり未知の世界をそれぞれに背負っている。

遠い過去の経験や記憶は、ほとんど役にたたない。母子なのだからなどというおおくくりな判断はなお危険でもある。

似ているもの同士は、相手の反応や心理も予測がつくだけに、発言や行動も自ら規制をかける。

血縁のつながりは、へたに緊張感を高める危険は避けなければならない。

息子というのは娘とちがって、ことば数は少ない。おしゃべり好きの身には厳しい。

二週間もすぎたある朝、食後に大好きなこうばしい匂いが鼻をくすぐった。

コーヒーだ。丁寧にドリップで入れたコーヒーが眼の前にある。

「ああ、いい匂い」

コーヒーに眼がない母親に、一式買いそろえてふるまってくれたのだ。

毎朝、この匂いをかぐことができるのかなと少し期待してみる。

それから朝の楽しみが続いている。前日少し気まづいことがあっても、この匂いをかぐと、息子の心のありかも知ることができる。

細々とつながりの糸になっている。